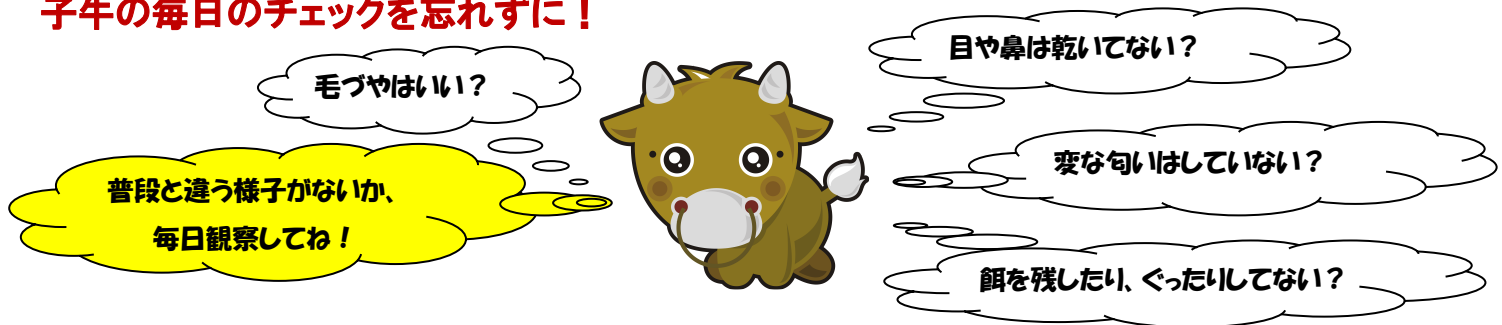


子牛の肺炎・下痢について

子牛は成牛と違って寒さに弱く、体温が1℃下がると生理活性(体を元気な状態に保つ力)が13%落ちるとされており、寒さは子牛期に下痢や肺炎を引き起こす最も大きな要因となります。

子牛の毎日のチェックを忘れずに！



まずは病気の予防が大事です！！

① 毎日の基本的な観察

(元気、食欲、挙動、呼吸、鼻鏡、目、耳、毛づや、糞便など、いつもと違う様子がないか観察)

② 病原体への対策

(冷気が直接子牛に当たらないようにする、乾燥した敷料を常に敷く、農場に出入りする際の消毒)

③ 畜舎の環境を清潔にする(餌場に糞が入らないようにする、牛舎内の換気を良くする)

④ 免疫力や抵抗力のアップ(初乳を必ず飲ませる)

* 子牛の体を冷やさないよう、専用の洋服を着せるほかに使い古しの毛布やアルミシートを体にまくのも効果的です。

* 初乳の給与は、生まれて6時間以内に母牛の初乳を2L以上を1回、12時間以内に2L以上をもう1回(生後1日以内に2回)与えるのが理想的です。乳房炎や白血病などで母牛の初乳給与ができない場合は、凍結初乳(搾乳1回目の母乳を凍らせたもの)または市販の初乳製剤で対応しましょう。

(1)子牛の肺炎について

肺炎の徴候：開口、腹式呼吸や発咳などの呼吸器症状や、**鼻汁**(水のようなものや膿が混ざったようなもの)を垂らしたり、反対に**鼻鏡が乾燥して割れていたら**注意してください。

肺炎の原因：①換気不良(糞尿からのアンモニアガスの充満)、②冷気の吸入(喉の細菌が増殖する)、③湿った敷料(体温を急激に奪う)、④1群あたりの構成頭数の増加(牛舎が広くても、居心地の良いところを選ぶことにより密飼いと同じ状況になる)、⑤初乳給与不足や栄養失調

これらによって、体の抵抗力(免疫力)が低下することに大きな原因があります。

☆肺炎発見ポイント☆

①バケツで代用乳を飲ますときに咳込む牛や、呼吸が荒くミルクを飲まない牛がいたら、獣医師に相談しましょう。

②バケツで代用乳を飲ませるときは、**あわてて牛が口を突っ込み鼻腔まで水面下に埋没させる場合があります。これも肺炎の原因になるので、ハッチへのバケツの置き方に注意してください。**

* 子牛の肺炎は下痢症の後に発生することが多く、また下痢症と合併したかたちで発病することもあります。

(2)子牛の下痢について

下痢の徴候：子牛の下痢は、寒い冬場と高温多湿の梅雨から夏にかけて特に多くなります。子牛がうずくまって震えていたり、変な匂いの便をしていたら要注意です。

背中 of 皮膚にしわが寄っていたり、皮膚を引っ張っても戻りが遅い場合は脱水を疑いましょう。下痢と脱水には、大きな関わりがあります。

下痢の原因：①寒冷・多湿の気象条件、②初乳の摂取不足や過摂取、③離乳後の急激な飼料変化・飲水量の過多、④不十分な牛舎の衛生管理などが考えられます。

《糞の色・状態でわかる病気の一覧》

便の性状	原因	対策
軟便～泥状の便	消化不良・コクシジウムや寄生虫の感染	薬の投与・飼育環境の浄化
灰白色便	脂肪の消化・吸収不良、ロタウイルス・コロナウイルス・サルモネラなどの感染	胆汁酸製剤の添加（消化不良の場合） 抗菌剤投与・同居感染の防止（感染の場合）
黄色水様便	ロタウイルス・サルモネラなどの感染	抗菌剤投与・同居感染の防止・ 生菌剤の連続投与
血便	病原性大腸菌やコクシジウム・サルモネラの重篤感染	隔離・脱水注意・同居感染の防止・ 止血剤投与
偽膜（ちぎれた腸のような物）	重度の炎症・クロストリジウムの関与	生菌剤の連続投与・脱水注意

☆下痢発見ポイント☆

①牛の様子を見て、子牛の頸側部の皮膚を5指で握るように引っ張り、指を離したときヒダが元に戻りにくいときは脱水を疑います。脱水している下痢の牛がいたら、要注意です。

②下痢をしていたら、まず経口補液剤を飲ませて、獣医師に治療してもらいましょう。

これらの症状を重症化させないためには、
病気を早めに発見するのが鍵！！



健康な子牛を育て、
よりよい農場経営につなげましょう

お問い合わせは・・・

石川県南部家畜保健衛生所 076(257)1262

まで